

月報

46号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 嶋

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL (078) 734-5989

「主思派」のこと

姜 左 彦

私は訪韓のたびにソウルの教保文庫に立ち寄るのが慣例となつていますが、昨年後半期から、韓国では北朝鮮でいままで出版された多くの本が復刻されていることはここ日本でもよく知られている。

ところが今年の二月十六・十七日には、東亜日報主催の三一運動七〇周年記念シンポジウムに招かれて報韓した。そこではいわゆる「民衆史観」による若い研究者たちの報告や討論もあり、新旧世代の三一運動観の激突もあつたりして興味津津たるものがあつた。

シンポジウムがおわつた十七日の晩に何人かの旧知の教授達と食事をしたが、頻繁にキャンパスの中の「学生会館」のことが話題にのぼつていた。私は初めて聞く用語なのでその意味を問うと、「主体思想派」の略称だそうである。またそのグループの中では「金正日」(敬愛する首領金正日同志)、「金日成」(親愛なる指導者金正日同志)の略称なども盛んに使われるという。いまこのことを知らずして、韓国の学生運動は理解出来ないともいつていた。

しかも驚くことに、「主思派」のグループは相手と十分接触して吟味し、金日成主義を論評的に評論する者は遠ざけ、無条件的に受け入れるものだけを加入させ、プロ化したかれらの中核部隊は、学生運動ばかりでなく、労働運動、在野の運動にまで拡散しているという。大きな疑問はその学習テキストだが、平壤放送の主体思想解説講座を録音した非合法印刷物が大学街に出回っているらしい。

日本では反政府運動＝民主化運動というイメージがあるが、まさか韓国の金日成主義化を、民主化運動とはいえないだろう。反政府運動にもいろいろな思潮があるようで、それ

ぞれの運動がどういう思想に導かれているのか、その内在的な質が問われているように思われた。

在日朝鮮人運動史研究会 第一一二回例会

(一九八九年六月十一日)

今回の例会は總會ということで研究報告はなし。六名から欠席の連絡があり、参加者は九名であった。最近の動向と言うことで、リングホーファー氏から先日、開かれた「三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者（李基允、袁相度）の追悼碑を建立する会」結成集会の報告。金英連氏から「GHQ文書と在日朝鮮人」研究のための交流会についてのお知らせ（七月九日、東京にて。詳しくは飛田氏まで）。飛田氏からは、五月二十九日、五三歳の若さで亡くなられた、梶村秀樹先生のお葬式の様子が報告された。

続いて、各自が最近の研究課題を述べた。以下に列挙する。

「在日朝鮮人問題を日本の国際化の視点から考える」（リングホーファー）

「日本政府とGHQの問題」（飛田）

「解放直後の左翼歌謡」（山根）

「これからの在日朝鮮人を考える」（金森）

「GHQ文書の在日朝鮮人関係の資料発掘」（金）

「朴春琴をどう評価するか」（松田）

「朝鮮期の朝鮮人学校教科書の再整理」（藤井）

「社運協での資料整理をメンバーの研究に役立てたい」（谷合）

「在日朝鮮人にたいする同化問題」（鄭）

「〇年を越えた在日の自分史を執筆する」（但し、現在は日本キリスト教の南洋伝道史を研究のため、当分お預け）（韓）

最後に、参加者全員で、今後研究会の運営をどうして行くかを話し合った。

『在日朝鮮人史研究』の発行を維持するために、年会費として四千円を会計（堀内氏）に納めて、会員となる。会員には、

『在日朝鮮人史研究』三部が配布される。

また、毎月の例会への参加者がすくなくことから、会員拡大もかねて、新聞・雑誌等に例会案内を掲載することになった。

今後の報告予定

八九	七・九	堀内
八	夏休み	
九・一〇	金英連	
一〇・八	リングホーファー	
一一・一二	水野	
一二・一〇	松田	
一・一四	中島・洪	
二・一一	谷合	
三・一一	山根	
四・八	藤井	
五・一三	飛田	
六・一〇	金森	



(一九八九年六月一八日)

「金玉均の政權獲得構想の展開と

大阪事件との関係について」 金 河元

すでに周知のものとなっていた一定の事実にもとづいて金玉均が亡命後十カ月も過ぎた一八八五年十月という時期に書かれた「甲申日録」の史料批判において、甲申政変だけに主な焦点があてられている事件や対話が実際あったか否かという検討は、充分とはおもわれないという疑問のもとに、報告者はまず「致密留書」（金玉均が亡命地日本から国内同志の李載元に送った書翰）及び「甲申日録」の執筆時期と内容、それら的大阪事件との関係等を検討して見ることによって、金玉均の政治活動の中には、まだ知られていない次のような新しい事実関係もあったことに気が付いた。「密書」は大坂事件と関係して金が作成したクーデター再起計画書であって、その内容は大阪事件関連者らの朝鮮改革構想と基本的に一致しており、具体的にはフランスの支援下日本民権左派の行動隊だけがその主力となり朝鮮の守旧派の首脳部をテロで倒し開化派政權を樹立するといふものであった。そしてこのようなクーデター再起計画を練って行きながら、その行動の直前の段階（一八八五年十月頃）で、金は日本政府が甲申政変を前後にしていかなった金に対する背信的行為等をはじめ、当時すでに公然と知られていた一定の事実を元にした「甲申日録」を執筆する一方、その情報を新聞を通じて洩らしていた。又「甲申日録」も活字体ではなく原稿状態で流すことによって、日本や朝鮮政府の注意を大阪事件から金自

身に集中させようと図った。従って「甲申日録」の内容は日本政府の背信的行為の暴露、福沢諭吉や井上角五郎らの弁護、守旧派非難等であった。それは今後自分の政治活動には直接的には何の影響をも及ばせない、すでに過ぎ去ってしまった一定の概知の事実を、ただの個人的感情的立場から書いたにすぎない著作物ではなく、「甲申日録」の執筆それ自体が政治家金玉均の計画された精緻な政治活動であった。一八八三年七月井上馨外務卿との借款交渉が失敗に終わるや、金はその借款問題を書（擬以朝鮮策略呈）の形で後藤象二郎に依頼した。その内容は朝鮮の改革はまず武力による守旧派打倒から始まるが、それは朝鮮人の力では不可能で、日本の財力・武力・人力に頼らざるを得ないもので、これらのことは朴泳孝ら開化派首脳部内ですでに決定済の事項であった。又日本依存の金ら開化派のクーデター計画は、金の借款交渉失敗、守旧派の金らに対する政治的攻撃にさらされてという外因によって、始めてられたものでなく、金の借款交渉の前、即ちおそくとも一八八三年四月にはクーデターの計画は完了し、朴泳孝の新式軍隊養成という具体的な実行段階へ展開していたと思われる。

